

# 鳥居フミ子教授のご退任にあたって

室 伏 信 助

鳥居フミ子教授は1977年4月、本学に教授として就任されてから1996年3月に退職されるまで19年間にわたって日本文学科で中近世文学を担当され、また文理学部広報委員会委員長・同教務部長・同大学院教務委員長・東京女子大学学会常務委員・日本文学科主任・比較文化研究所運営委員・両学部広報委員会委員長のほか、大学図書館長・評議員・比較文化研究所および女性学研究所各商議員・大学図書館特別委員会委員長などの要職を歴任され、本学の教学に貢献された。その間実践女子大学・成蹊大学・中華人民共和国南開大学等に非常勤講師として出講されたほか、国文学研究資料館文献収集計画委員会委員・日本歌謡学会理事評議員・全国大学国語国文学会理事等の学会活動にも尽力された。そのことは後述のように、数々の著書・論文による斬新な学問的成果のおのずからなる帰結として課せられた責務であったとも言い得よう。

鳥居教授は、1952年に東京女子大学を卒業された後、東京大学大学院人文科学研究科修士課程・同博士課程を修了され、実践女子短期大学専任講師・同女子大学助教授を経て1975年に教授に就任、その間、東京女子大学・聖心女子大学の各非常勤講師のほか国立台湾大学に海外研修された。大学院在学中より江戸浄瑠璃の研究に専念され、1959年に『近世文芸』に発表された論文「土佐少掾について」以降、本学紀要『論集』や『東京女子大学日本文学』その他の学界誌に精力的に発表されてきた土佐浄瑠璃の研究成果が体系的に編成され、1989年に『近世芸能の研究—土佐浄瑠璃の世界—』となって刊行された。本書は先人未踏の画期的著述として高く評価され、志田延義賞を受賞されたのである。本論集に結実する前提には、1972年より77年にわたって刊行された『土佐浄瑠璃正本集』全3巻があり、基礎資料の整理吟味が徹底していた。また『正本近松全集』や対訳古典シリーズの『近松世話物集』『台湾大学所蔵近世芸文集』等の周辺諸資料の本文研究や注釈という方面にも考察は行届き、その上に本領の諸研究が生み出されたのである。1991年、「土佐浄瑠璃の研究」によって東京大学より文学博士の学位を授与せられた。研究の主眼となった土佐浄瑠璃とは、17世紀から18世紀にかけて、邦楽の機運に満ちた城下町江戸に流行した芸能であり、先行作品に取材し、新趣向をもって当代化した新戯曲で約70種も存在するが、その正本に対する研究は未開で評価も定まらなかったものを、上述の基礎資料を踏まえて精力的に踏査され、その成果を「土佐浄瑠璃の系譜」「古浄瑠璃の継承と発展」「軍記ものの浄瑠璃化」「御伽草子・仮名草子の受容」「王朝世界の当代化」「近世浄瑠璃史の中の土佐浄瑠璃」の6

章に編成、それぞれのテーマに従い、縦横に資料を駆使して論述され、対象化された作品の特色をその内容・構成・脚色法のそれぞれに亘って微細に論究し、全体を通して土佐浄瑠璃の世界を文学史的に位置づけられた。殊に王朝文学との関わりを論ずる第5章は筆者の専攻分野と重なり、きわめて興味津々たる内容に満ちている。中世に至るさまざまな口伝や伝承が作劇の世界にもその構成や詞章に著しい影響を与え、当代化していく軌跡を実証的に綿密に追究し彫り上げている。文献の単なる享受史や受容史ではない。新しい時代の生命感を感得させる作劇術をそこに見る思いがした。

鳥居教授がすぐれた文学研究者であることは、また同時にすぐれた教育者でもあることと矛盾しない。本学における教授の指導はきわめて徹底したきびしさをもつが、それは学問への限りなく真摯な姿勢そのものであり、その真意を深く理解した受講生にとって、それは親しみ易い、ある意味でやさしさに満ちた方法ではなかったか。卒業生の真話として聞き及んだばかりでなく、筆者が平素折に触れて接する鳥居教授の卓越さには秘かに驚きを重ねていたが、そのことは同時に他者の正当性への卒直な受容・是認となって表明されるのである。薫陶を受けた多数の受講生による記念論集には、永年に亘る鳥居教授の学問の遺産が、受容の幅を拡げ、新しい見事な華を開くことになった。また、退任近くに刊行された鳥居教授の大著『近世芸能の発掘』が、このたび日本演劇学会河竹賞を受賞されることになった。心からお慶び申上げたい。また教授が永年蒐集された資料が、『<sup>鳥居</sup>浄瑠璃稀本集』となって結実した。後進による今後の活用が期待される。

最後に個人的な思い出を書き添えたい。筆者が本学に就任した折、キャンパスの満開の桜を見せていただいたが、4号館の階上から俯瞰した一面の桜花は、下から仰ぎ見るのとは異なり、そのゆらめく華の波は一瞬の眩惑となって私を襲った。「世の中に絶えて桜のなかりせば」と詠んだ古人の心や、桜の樹の下に不吉な幻想を描いた近代の作家の精神など、めくるめく思いの過ぎた果てに、「桜って何てさびしい花でしょうか」と呟いた私の独言に、深く頷かれた鳥居先生のお姿は、今に忘れ難い思いをとどめている。母校に永く深く接してこられた鳥居教授が、今ここを立ち去られる思いは、他者の理解を絶するものがあるろう。東京女子大学にとってかけがえのない存在であられた鳥居教授のご退職は、残された我々にとっても大きな痛手ではあるが、校務の煩雑さから解放されて、今後は一途に研究に没頭され、さらに数々の業績を積み重ねられる前途を祝福申し上げたい。どうぞ健康に留意され、いつまでも先達として私共後進の大きな目標であっていただきたいと祈念する次第である。